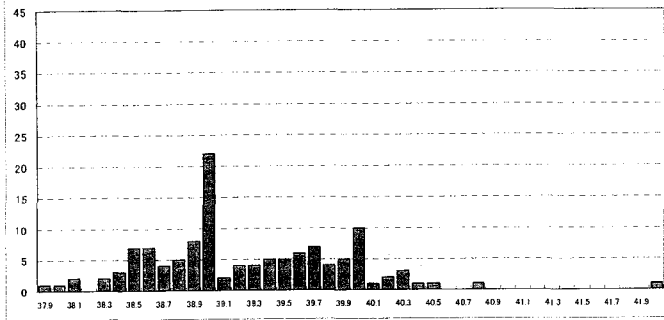
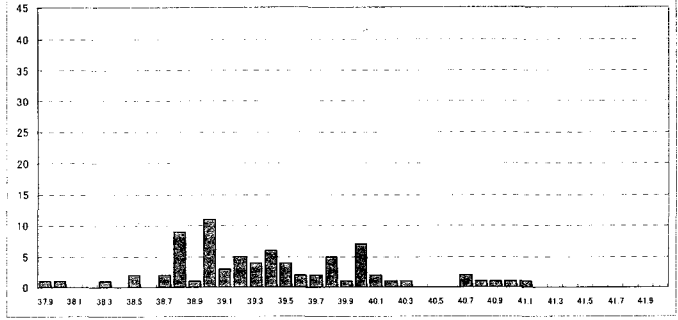


図7.最高体温

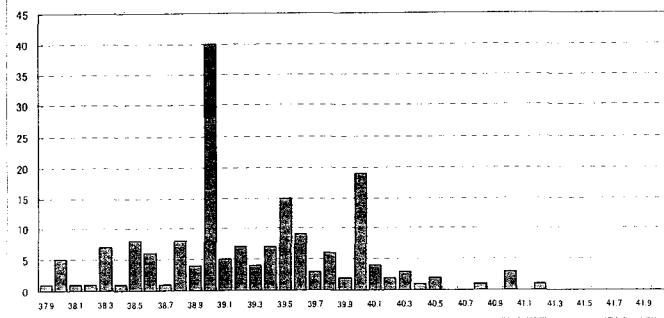
2006/2007 n=125 平均値39.24中央値39.0



2007/2008 n=77 平均値39.41中央値39.3



2008/2009 n=177 平均値39.28中央値39.2



2009/2010 n=256 平均値39.29 中央値39.2

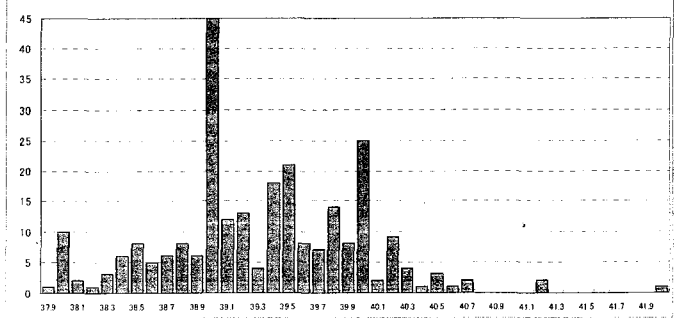
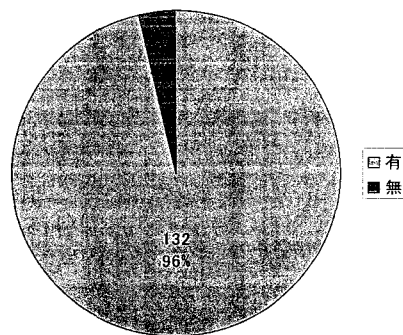
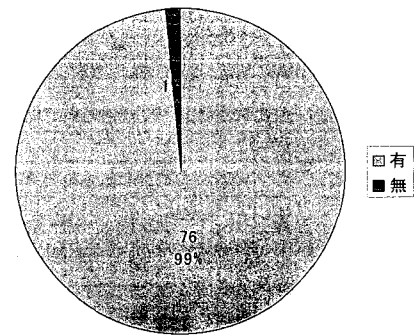


図8.インフルエンザ迅速診断 キットの実施の有無

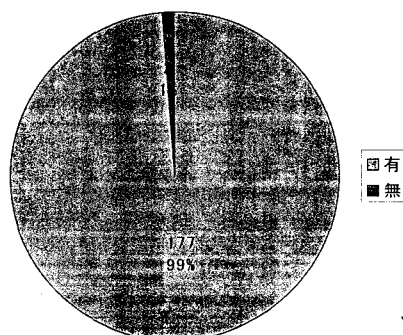
2006/2007 n=137



2007/2008 n=77



2008/2009 n=179



2009/2010 n=271

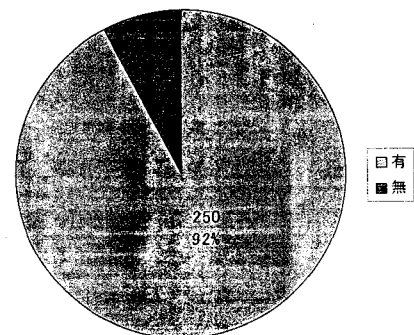
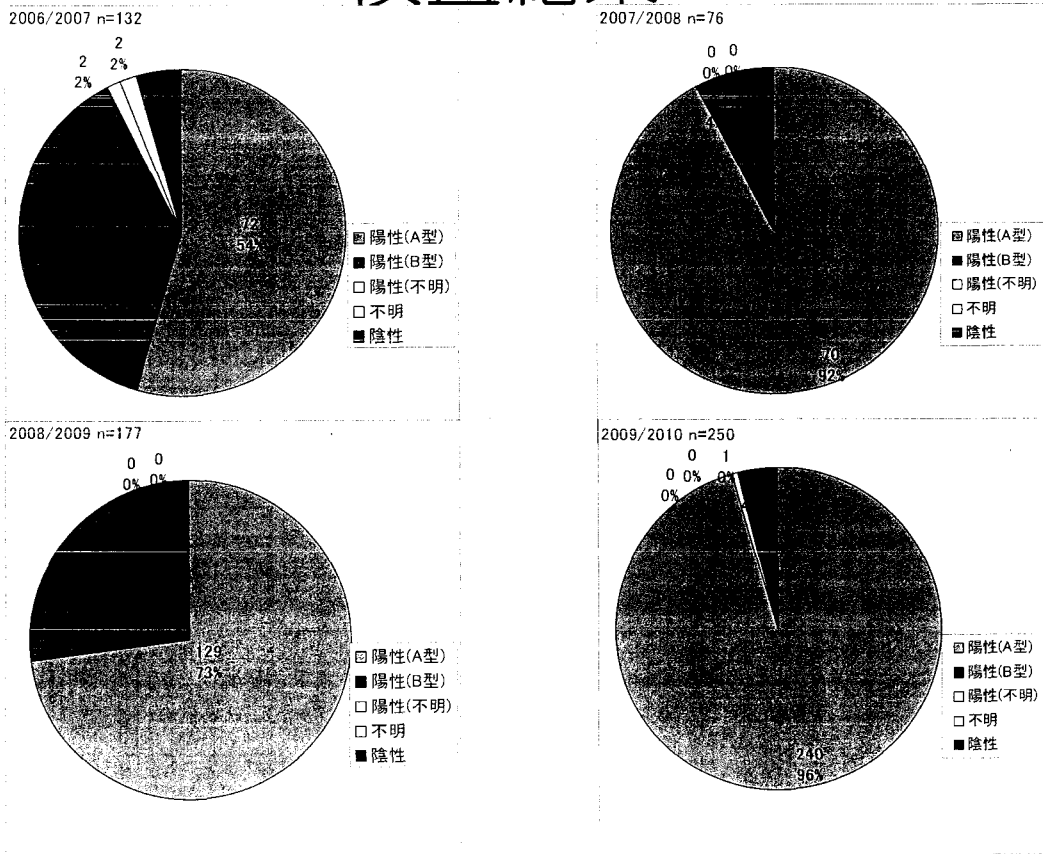
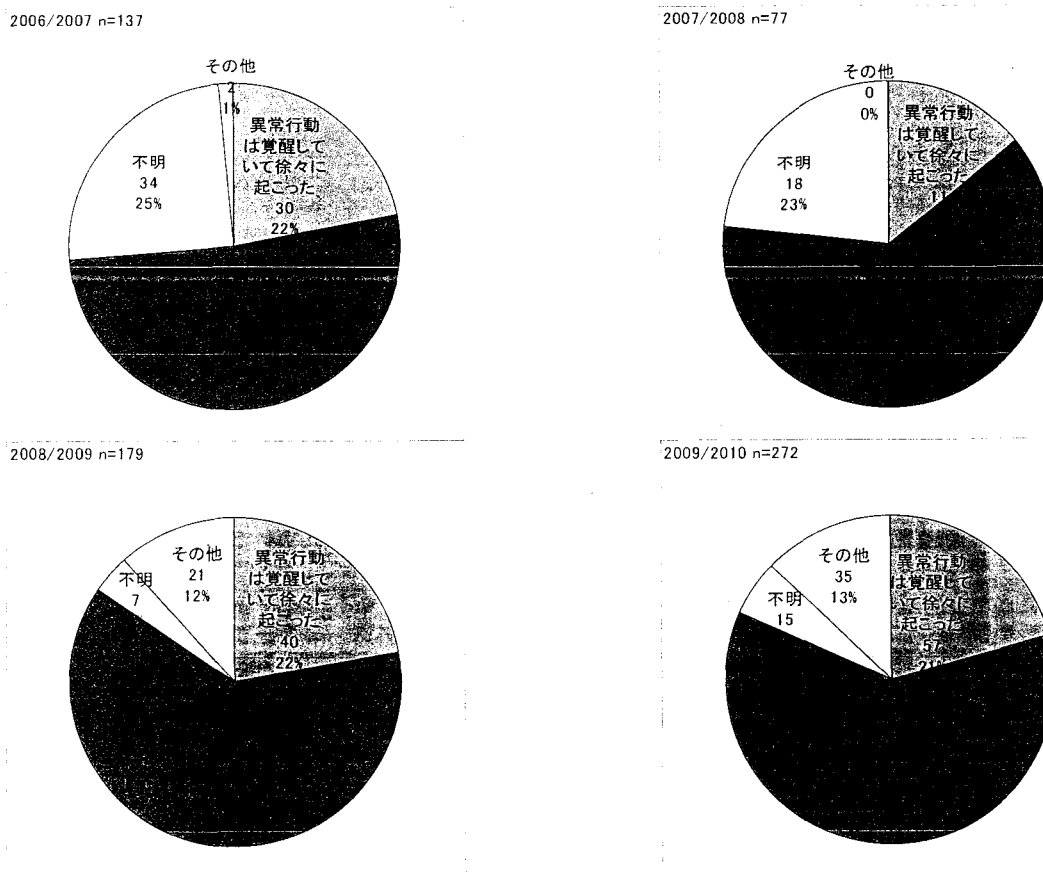


図9.迅速診断キットによる検査結果



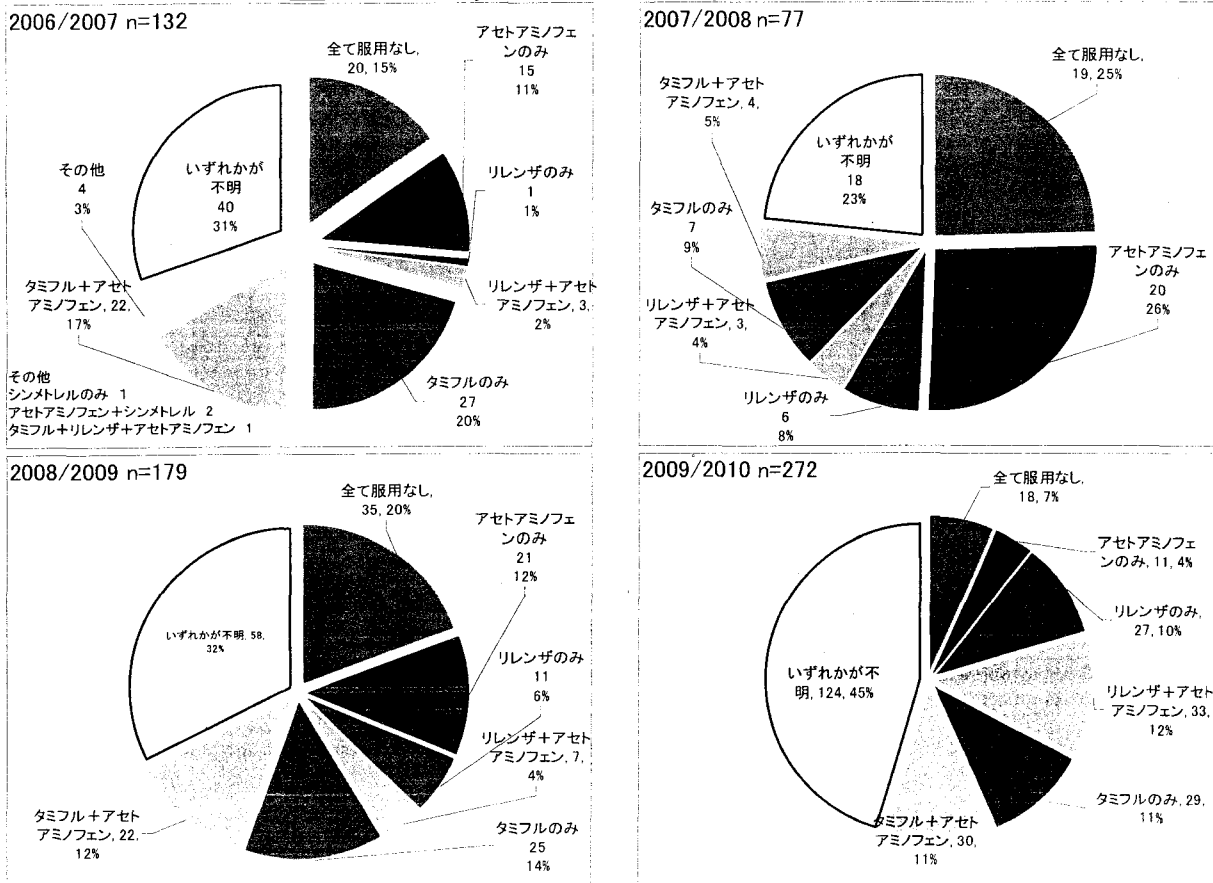
21

図10.異常行動と睡眠の関係



2

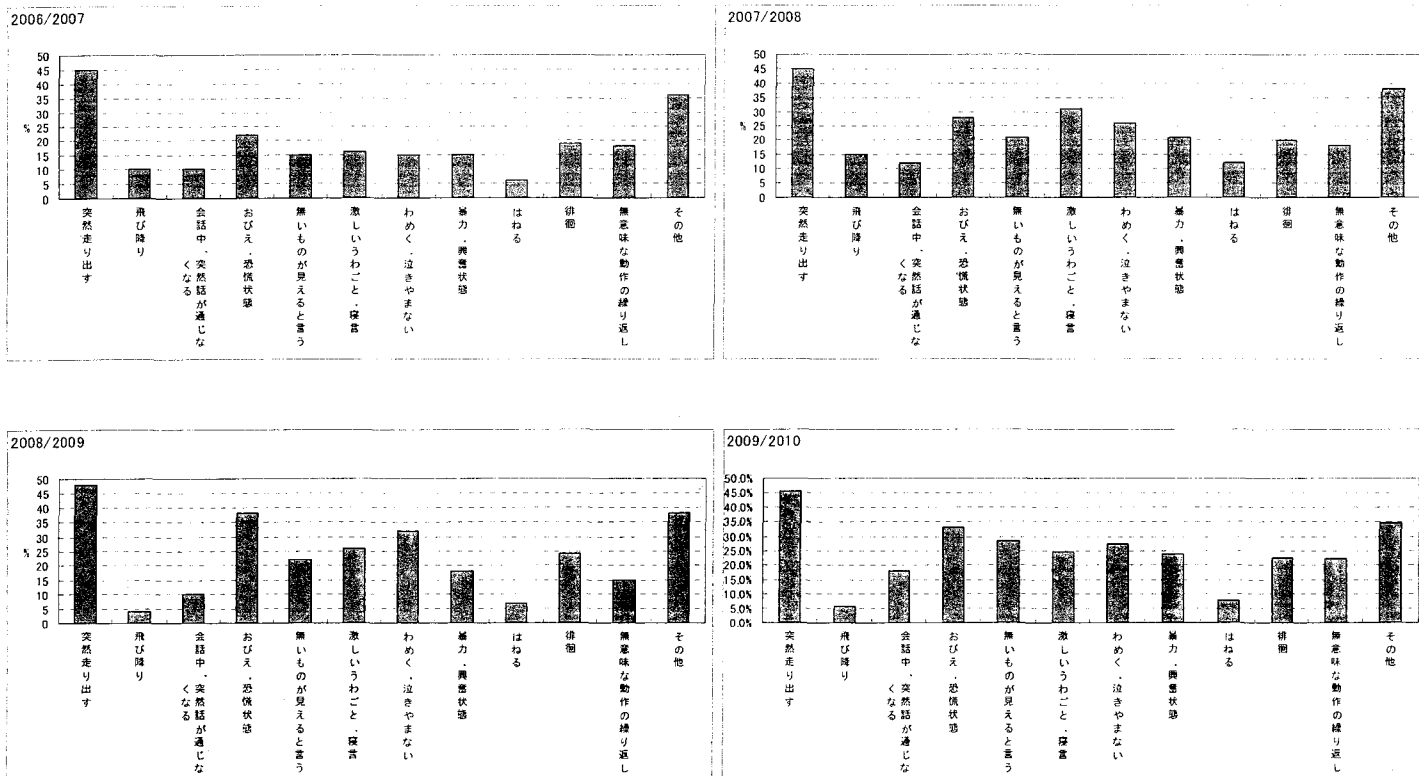
図11.薬の組み合わせ



23

注:タミフル、シメトレル、リレンザ、アセトアミノフェンの4剤の服用有無が明らかな症例についての内訳。
4剤のうち一部薬剤処方有り症例でも、併用状況が不明な症例は「いずれかが不明」に分類。

図12.異常行動の分類(複数回答)



24

注:複数回答で、それぞれ割合で示しているなので、合計は100%を超える。

突然走り出す・飛び降りのみ の分析

図13.患者の年齢

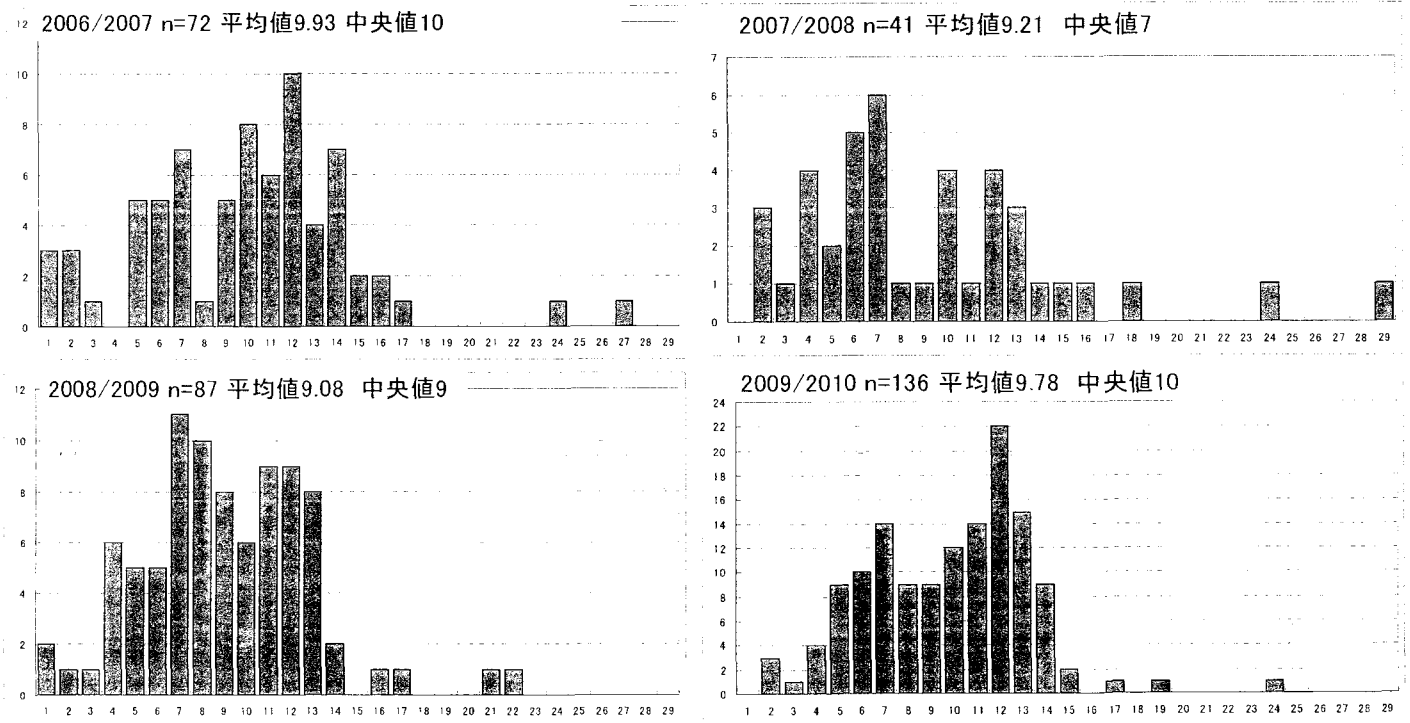


図14.患者の性別

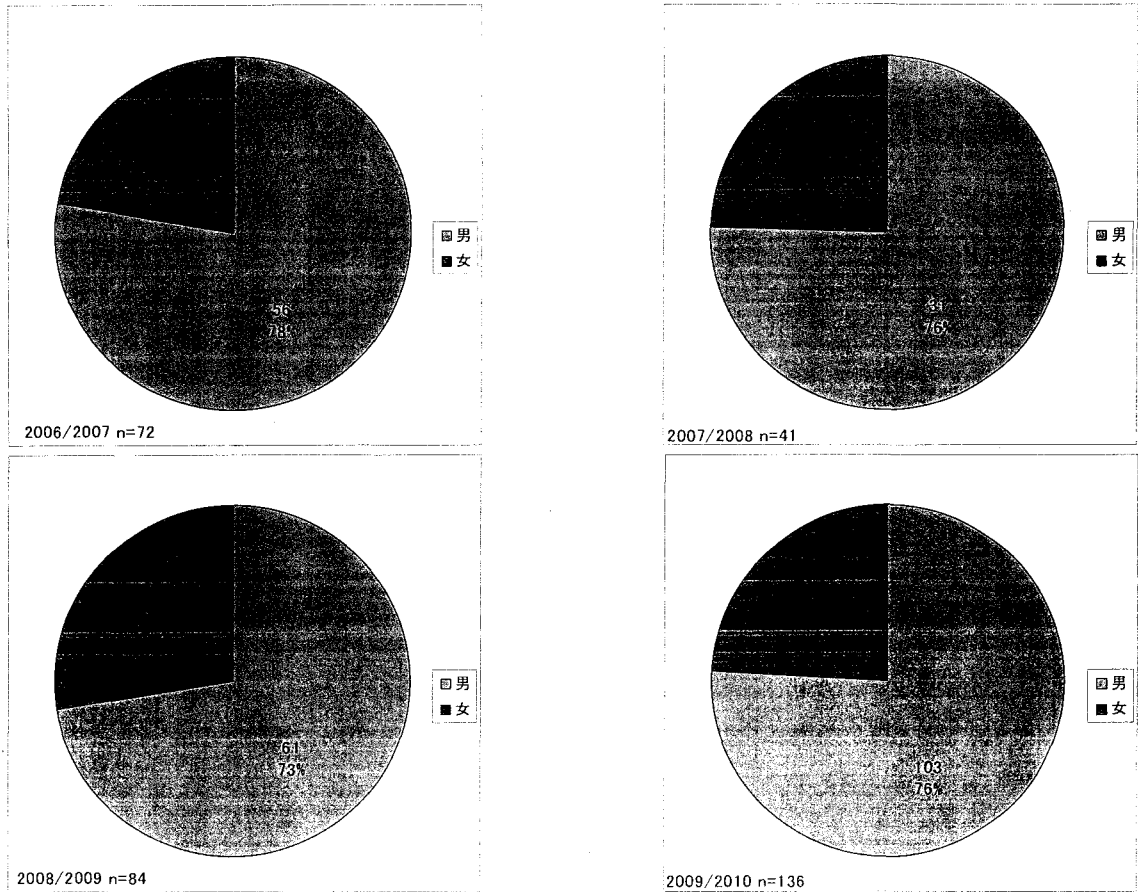
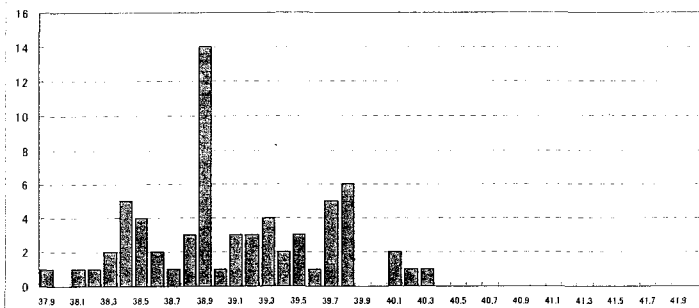
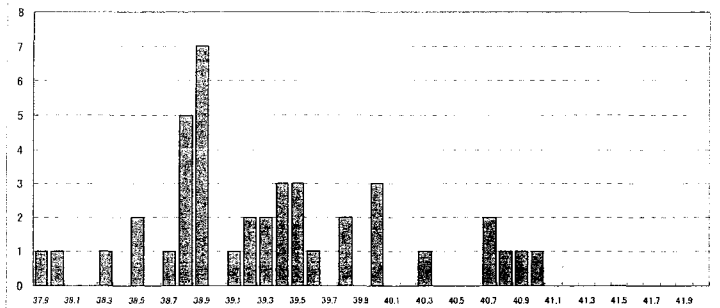


図15.最高体温

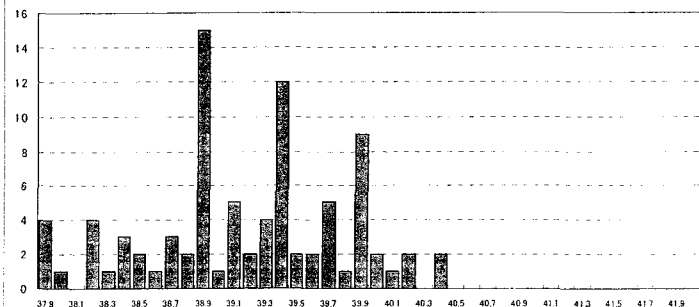
2006/2007 n=66 平均値39.24中央値39.0



2007/2008 n=41 平均値39.34中央値39.2



2008/2009 n=86 平均値39.26 中央値39.3



2009/2010 n=127 平均値39.21 中央値39.1

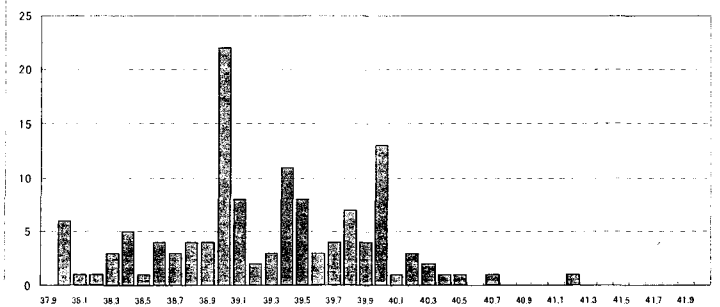
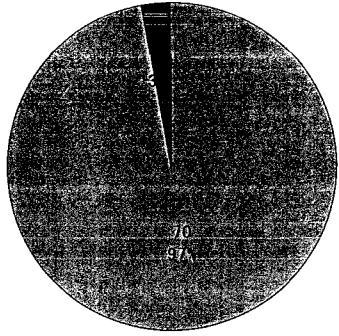


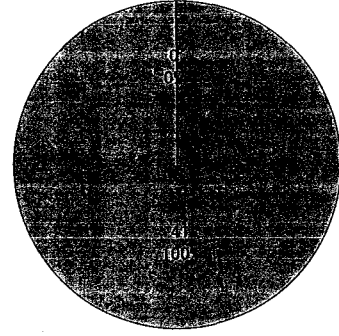
図20.インフルエンザ迅速診断キットの実施の有無

2006/2007 n=72

2007/2008 n=41



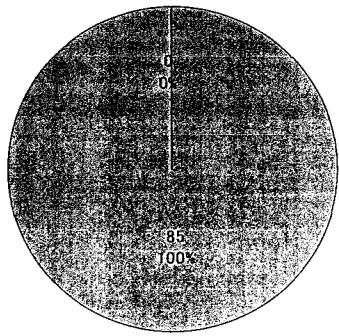
有
無



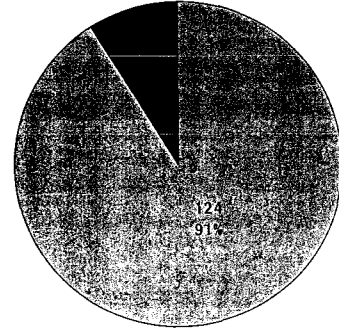
有
無

2008/2009 n=85

2009/2010 n=136



有
無

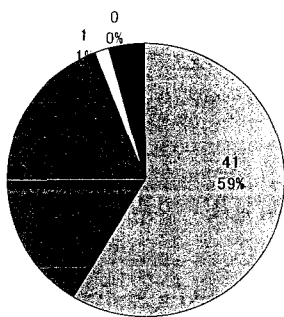


有
無

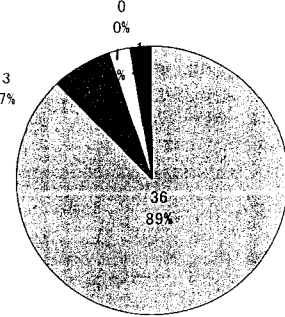
図21.迅速診断キットによる検査結果

2006/2007 n=70

2007/2008 n=41



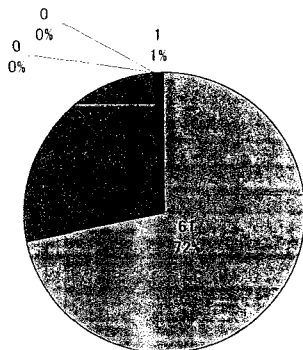
陽性(A型)
陽性(B型)
陽性(不明)
不明
陰性



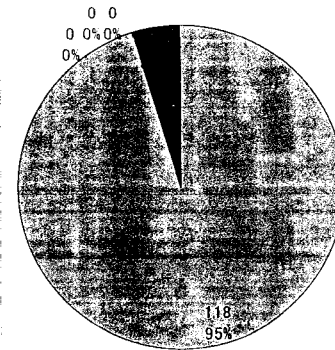
陽性(A型)
陽性(B型)
陽性(不明)
不明
陰性

2008/2009 n=85

2009/2010 n=124



陽性(A型)
陽性(B型)
陽性(不明)
不明
陰性



陽性(A型)
陽性(B型)
陽性(不明)
不明
陰性

図22.薬の組み合わせ

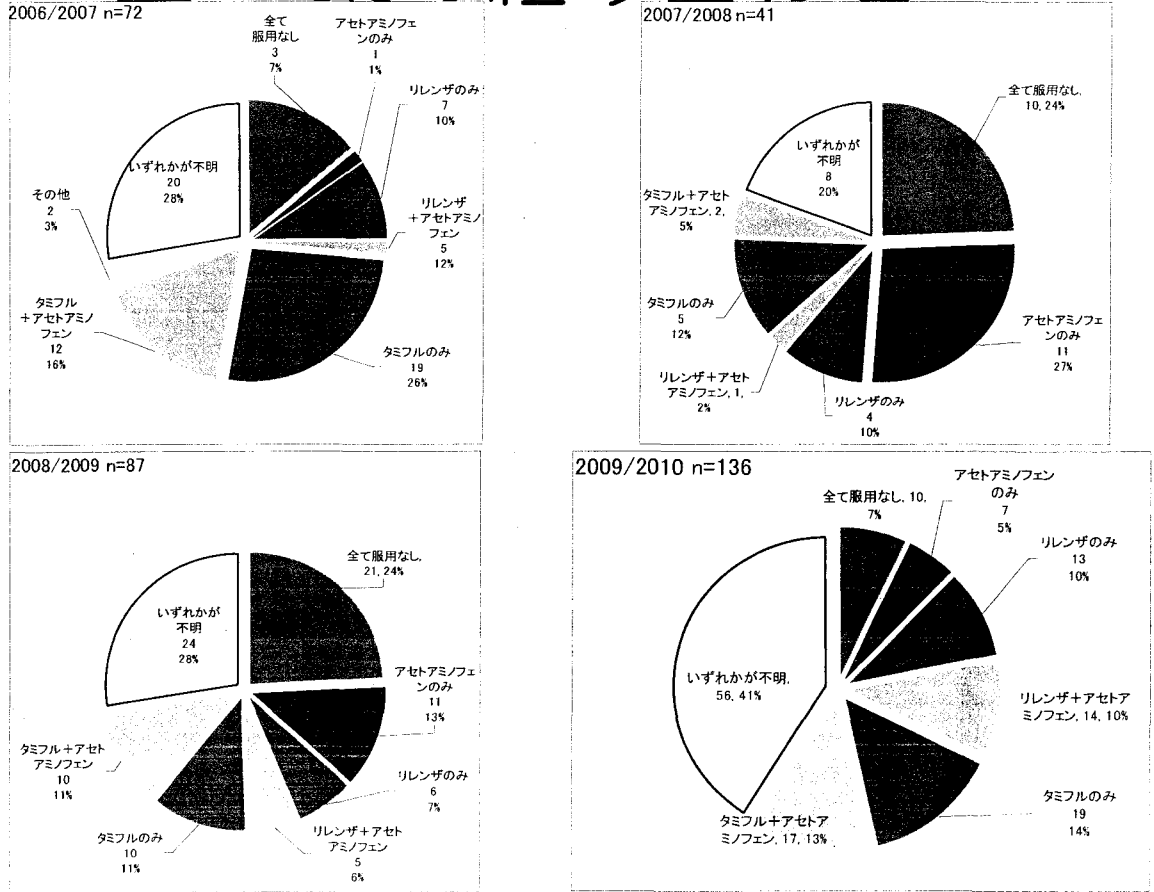
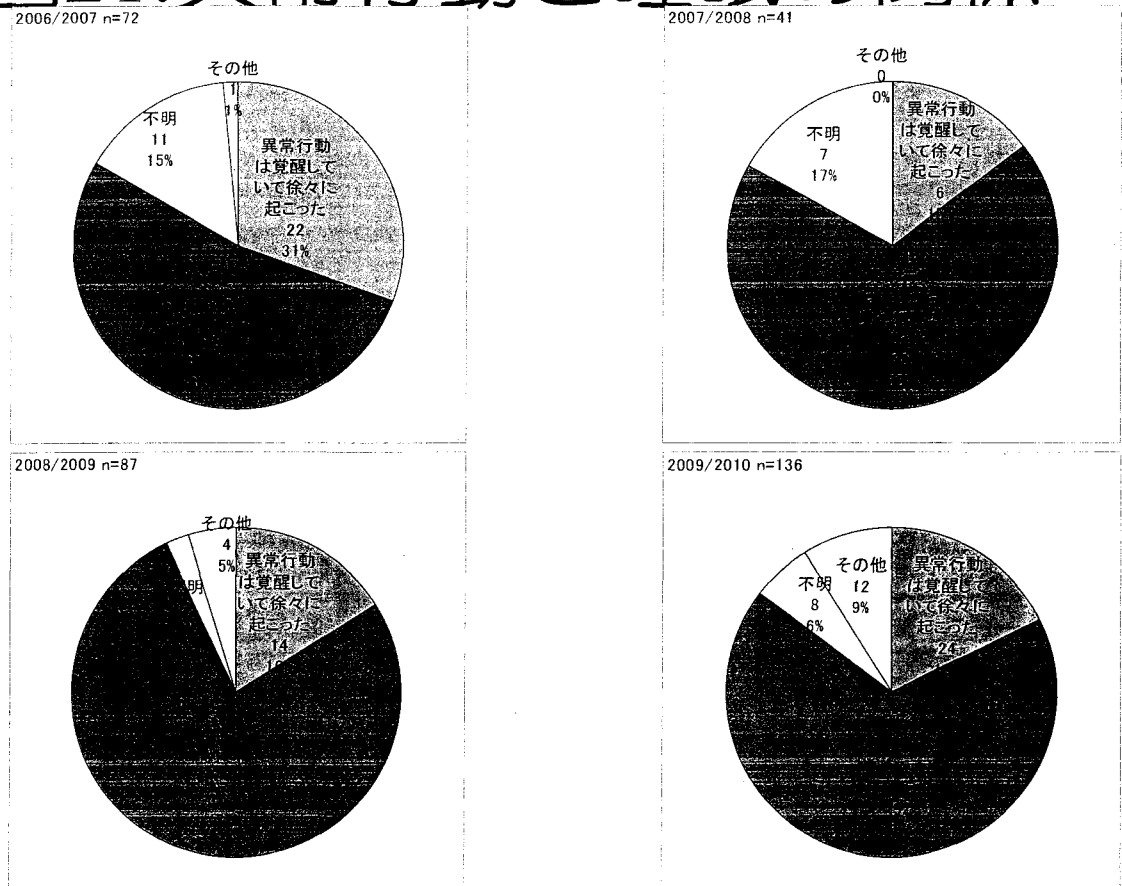


図21.異常行動と睡眠の関係



まとめ

- 新型インフルエンザの大きな流行に併せて、異常行動の報告も多かった。
- 重度の報告のピークは、新型インフルエンザのピークよりも4週間早かった。
- 異常行動の発生状況について、これまでの報告では、従来の季節性インフルエンザにおける異常行動の報告傾向と概ね類似しているが、新型インフルエンザ患者発生の状況に応じて年齢が若干高く11才が最頻値で、男性の方がやや多かった。
- 薬剤の使用状況に関しては、10代へのタミフルの処方差し控え以降、相対的に、リレンザ服用例が増加していると思われ、両薬剤での報告割合はシーズンによって異なるが、2009-2010シーズンでは、リレンザ服用例での異常行動報告例が、重度異常行動全体でタミフル服用例と同程度、突然の走り出し、飛び降りなどでタミフルがやや多いという状況であった。このような状況からは、従来の季節性インフルエンザと同様に、抗ウイルス薬の種類、使用の有無と異常行動については、新型インフルエンザでも特定の関係に限られるものではないことが窺える。
- また、異常行動の報告内容には、飛び降りなど、結果として重大な事案が発生しかねない事案も従来同様に報告されている。

○以上のことから、新型インフルエンザに対しても、従来の季節性インフルエンザ同様に異常行動が起こり得るとして、従来の注意喚起を継続することが必要と考えられる。